

令和元年5月22日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K13112

研究課題名(和文) 集団心の可能性・妥当性・限界：機能主義的視点からのアプローチ

研究課題名(英文) Conceptual analysis of group mind

研究代表者

唐沢 かわり (Karasawa, Kaori)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：50249348

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、集団心に対する通俗的な信念の内実とその機能を、社会心理学的実験により明らかにするとともに、「集団心」の概念化の可能性、妥当性、限界を、科学哲学との協同により、機能主義的な視点から検討することを目的としていた。主たる成果は次の2点である。1) 集団心は機能的観点から、研究ツールとして有用な概念となり、概念工学的な観点から構築することが必要となる。2) Grayらの心の知覚の2次元モデルが適用可能であり、組織不祥事などに対する道徳的判断との関係も、個人の心の知覚に関する研究知見と整合する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が生み出す結果の学術的意義は、集団心の特性にかかわる実証的知見を生成しつつ、社会心理学と科学哲学の協同作業を通して、集団心概念の機能主義的な意義を、現実場面を用いながら明らかにしたところにある。また、組織の不祥事に対する道徳的判断に対して、集団の心の知覚が重要な規定要因となり得ることを示し、集団心の知覚が、集団に対する態度の基盤を構成することを主張したとともに、集団メンバー内においても、個々人の認知の総和や平均が、集団パフォーマンスを十分に説明しきれないことを示唆する結果は、応用的な価値としての社会的意義を認めることができる。

研究成果の概要(英文)：In this research, we examined the naive understanding of "group mind" and its functional utility by the social psychological studies and conceptual analysis. The main results are the following two points. 1) The concept of group mind would be an useful tool for the analysis of group performance and judgments toward groups. Reconstruction is needed under the framework of "concept engineering." 2) The two-dimensional model of the mind perception of Gray et al. is applicable, and the relationship with moral judgment on organizational scandals is also consistent with the research findings on perception of the individual mind.

研究分野：社会心理学

キーワード：集団心 心の知覚 道徳的判断

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- 1) 社会心理学は、Allport (1924) 以来、「集団心」の实在性を否定し、集団・組織研究も、個人の認知や感情、意図、動機などの心的機能の観点から、「集団・組織行動」に至る過程のモデル化が進められてきた。この志向性は、社会心理学の発展には有効であったが、一方で、研究課題の範囲を制約し、社会的認知の隆盛とも相まって個人焦点の社会心理学を促進してきた。
- 2) 個人の心は存在するが集団の心は存在しないという主張自体が、近年の科学哲学が提示する「心」の实在性に関する議論からの再検討が必要な状況にある。例えば、脳科学の進展を背景とした「主観としての心は存在せず、我々の行動は物理現象である脳内・生理的過程に還元可能である」という消去主義的議論は、心的過程に着目するパラダイム自体への脅威であり、その対応として「心による行動の説明は、心の实在性ではなく説明における機能的役割により正当化される」という機能主義的な立場の強化が求められていた。
- 3) 社会心理学は個人の心の機能に対する通俗的信念を、心の概念化や研究仮説のリソースとして長らく利用してきた。一方、通俗的な集団や組織の行動説明は、集団の「心」への言及を豊かに含んでおり、集団についても同様のアプローチが成り立ち得る。また通俗的な集団心認知は我々の対集団・組織反応の基盤となるので、集団や組織の行動を「集団心」の観点から説明した知見の影響を検討することは、科学コミュニケーション上、重要な課題であった。

2. 研究の目的

- 1) 集団心概念を実証的な社会心理学に持ち込むための条件を科学哲学の立場から明確にする。特に、集団心概念が機能主義的視点から有効となる条件を、集団や組織の特性、参照する機能の種類などの点から明らかにする。
- 2) 集団心に対する通俗的な認知構造とそれが集団や組織への寛容または非寛容な反応(許し、非難、偏見など)に与える影響について実証的に明らかにする。その際、個人の心の認知次元として提案されている Gray らのモデル (Grey et al., 2007) を基盤として、集団や組織の「心的機能」の認知構造と、それが集団・組織への反応に及ぼす影響を、過去の研究の展望と新たなデータにより明らかにする。
- 3) 構成した集団心概念が、集団や組織の行動の説明変数として機能しうる程度を実証的に明らかにする。その際、家族などの小集団や企業組織のような規模の大きい集団、さらにはそれ自体は組織としての達成目標を持たない社会的カテゴリーとしての集団(例:日本人、女性など)まで、射程に入れる。また、集団心の構成概念としての定義および操作・測定に持ち込む際の方法論の具体例とその有効性を実証的に明らかにする。
- 4) 集団や組織研究に対して有用な集団心概念の可能性と限界について、科学的厳密さと知見の社会還元の重要さを踏まえたうえで考察する。特に、集団心概念を研究に取り込むことの意義と問題点、および集団心の観点から集団・組織行動を説明する研究知見を社会に提示することの功罪を論じ、今後の研究に示唆を与え得る考察を生成する。

3. 研究の方法

- 1) 集団心概念の可能と役割に関する理論的検討: 社会心理学は、個人の心は実在する(その一方、集団には心は実在しない)として研究を進めてきた。しかし、唯物主義、消去主義など、通俗的に私たちが心と呼ぶような心的過程(主観的経験としての感情、動機、意図など)の实在性自体に疑問を呈する複数の哲学的立場が存在する。このような哲学における議論の状況を、文献レビューにより整理する。その際、個人の心と集団や組織の心の存在の、それぞれを肯定・否定する科学哲学的議論をバランス良く取り上げ、各議論間の関係と問題点を明確にするとともに、個人の心的過程を情報処理過程としてとらえて、その実証的検討を妥当化してきた機能主義的な立場が確保される条件の明確化、の2点に留意した議論を行った。これらは文献研究を中心とするものであるが、その成果を定期的な検討会で確認していくとともに、学会等でのワークショップにより、議論の精緻化をはかった。
- 2) 集団心概念の機能に関する理論的検討と実証的知見の整合性検討: 上記の1)で得た知見を基盤にして、科学哲学が想定している「心」という概念が、実際に社会心理学の研究現場で操作・測定の対象となっている「心的過程」概念とどの程度整合的かを考察した。これらの作業は、具体的な社会心理学の研究を対象としたケーススタディも含めつつ、社会心

理学者と科学哲学者の協同的な議論とワークショップ、学会発表等により進めてきた。

- 3) 集団心認知の構造の解明：集団心認知の構造については、さまざまな集団や組織を対象として、心的諸機能に相当する特性認知の評定を研究参加者に求めるというパラダイムを基本としたデータ収集を行ってきた。具体的には、心的測定の付与をどの程度集団に対して行うかについて、集団の振る舞いに関するシナリオと、多様な集団一般の名称を提示しつつ、検討した。なお、心的機能認知の測定に際しては、「心の知覚」研究 (Grey et al., 2007 など) が明らかにした二次元である自律性 (Agency) と経験性 (Experience) に関する特徴を中心としたうえで、「人間性の知覚」研究 (Haslam, 2006 など) から示唆される人間性 (Human nature) 人間の独自性 (Human uniqueness) の諸特性を加えたものを用い、知見の蓄積に応じて改編する手続きを踏んだ。それらを基盤とし集団や組織に適用することで、より着実な成果が見込める研究計画が策定可能であるとともに、個人の心と集団心との概念的差異に関する考察が可能となった。
- 4) 集団心認知の影響過程の解明：影響過程については、他者の心的状態や機能の認知と対人反応に関する研究が、道徳的判断や交渉、偏見、援助、攻撃など、多様な社会的反応を対象に多数存在するので、これらを参照しつつ進めてきた。例えば「行動の原因を意図や動機などの心の機能に帰属させること」は行為者の責任判断を高めたり、「本質的で変更不可能な心の機能」の帰属は応報的攻撃を強めるなどの知見が明らかになっている。個人を対象とした主要研究の判断対象を「集団や組織」に変えた際の知見の再現性を確認しつつ、集団心認知の構造で得た知見を踏まえた尺度の改定を行うことで、より適切な研究へと改善した。集団ならではの 변수として、集団同一視、凝集性、実体性の認知などに関わる変数の影響も検討した。また、家族関係、会社組織、裁判員制度における合議場面、集団ステレオタイプなどを対象として、個人レベルの集団心認知が、他者の行動予測、集団内メンバーの対人関係、集団全体のパフォーマンスなどに影響するあり方を実験的に検討することにより、個人の総和を超えた集団心という概念が、研究知見を構築し、またその成果を実際に応用する上で、貢献しうるかどうかを考察した。それに当たっては、実験に加え、一般調査データや会社組織内での系統的な行動観察なども平行して進め、実証的知見の充実をはかってきた。

4. 研究成果

- 1) 集団心という概念の妥当性と機能：概念分析的な議論により、集団に心を認めることと人に心を認めることの本質的な差異は、私たち個人が持つ主観（心を持つという感覚）に依存する一方、心を機能的な観点から見るのであれば、集団にも人の心と同様の機能を認めることは、論理的な矛盾をもたらすものではなく、また、機能を措定することで、多様な分析が可能であり、集団研究が広がることにつながる点が論じられた。またそのような議論は、心を持たない他のエージェント（人工物など）にも拡大可能であり、本研究で蓄積した議論の汎用性を確認した。
- 2) 概念工学的な観点からも、集団心の妥当性をさらに検討する必要性が示唆された。概念工学とは、概念を「人類の幸福に資する」ために再構築（エンジニアリング）する営みである。集団心については、責任、道徳を担保するために必要とされる「自由な意思決定」が組織内にいかに保持されているかの認知が重要であること、一方、そのような判断は様々なバイアスを伴うので、それを修正することの妥当性や権利が問題となることが論点として挙げられた。またそこにおいて、人々の集団心としての規範意識を制度内に取り入れる手法が問題となることも議論した。なお、これら 1) 2) にかかわる成果は国内外の哲学系や社会心理学系の学会にて発表している。
- 3) 心の知覚の 2 次元モデルとの対応については、Gray らが提案した心の知覚の二次元モデルが、個人だけではなく、集団に対してもある程度適用できることを、実証的研究から明らかにした。複数の実証研究で、評定がこれら二次元に分かれることを確認している。なお、一般に心の知覚の評定値のみを見ると、Agency の知覚は高く、Experience が低いという結果が得られるが、しかし、媒介モデルによる分析により、これら 2 次元上での心の知覚が、集団を対象とした場合でも、個人を対象とした場合とほぼ同様の影響パターンを見せることが示された。最も、過去の研究で示唆されていた、両次元の相補性は見られず、Agency を高く評定することが、Experience の評定を高める傾向も見られた。このような結果が文化差として解釈されるべきかについては、今後の検討が必要である。
- 4) 集団心と道徳的判断に関して、さまざまな集団を対象に検討した実験や調査からは、Agency が責任を負うという道徳的立場の付与と連合していることが明らかになった。Agency と責任の付与に関する関係については、上述の概念工学的な視座からも、集団が

責任をとるなどの場面では重要である。いずれかの集団メンバー個人に保障などの責任を付与するのではなく、組織としての責任を追及する場合には、Agency に属する心的機能と同等の機能を集団に認めることの実効性を、今後さらに検討する必要があるだろう。Experience については、保護される立場とつながるかどうか、集団によって異なっていることが示唆された。結果は一貫性が欠けるところがあるが、組織よりも社会的カテゴリーのほうが、保護につながる程度が高い可能性が示唆されている。今後は尺度の洗練化も含めたうえで、より精緻な実証データが必要となる。

- 5) 上記の知見をまとめると、集団心という概念は、様々な集団に適用され機能し得る。家族などの親密な集団、企業などの組織、性別や人種などの社会的カテゴリーなどである。また、心の知覚には一定のバイアスが伴い、それにより道徳的判断がゆがむが、集団に対しても同様である。集団心は、集団の責任や道徳的立場を分析する上で有効な概念であり、人々もそれに関する素朴な信念を有しているが、一方で、バイアスを伴う判断の対象となり、それはしばしば偏見というネガティブな信念として共有されてしまう。また Agency に関わる心的機能は集団に実装されている機能（組織運営のありかたなど）として概念化が可能であるが、Experience に関わる心的機能は、それが集団に実在するわけではなく、むしろ、知覚者を意識したパフォーマンス機能になる可能性がある。研究に用いるための操作的定義のみならず、通俗的な信念としての集団心をいかに構築するかが、対集団態度の改善に関する実践的な研究の課題となる必要が示唆される。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計 15 件)

Ohtaka, M., & Karasawa, K. (2019) Perspective-taking in families based on the social relations model. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 58 ,111-115 査読有 0.2130/jjesp.1810

Tanibe, T., Hashimoto, T., Tomabechei, T., Masamoto, T & Karasawa, K. (2019) Attributing Mind to Groups and Their Members on Two Dimensions *Frontiers in Psychology* 査読有 10.3389/fpsyg.2019.00840

齋藤真由・白岩祐子・唐沢かおり (2018). 大学生における司法参加意欲の規定因：要因関連モデルを用いた検討 *実験社会心理学研究* 58 査読有 10.2130/jjesp.1704

Hashimoto, T., & Karasawa, K. (2018) Impact of consumer power on consumer's reactions to corporate transgression, *PLoS One* e0196819 査読有 10.1371/journal.pone.0196819

Tanibe, T., Hashimoto, T., & Karasawa, K. (2017). We perceive a mind in a robot when we help it. *PLoS One*, 12:e0180952. 査読有 doi: 10.1371/journal.pone.0180952.

竹下浩・山口裕幸(2017)チーム学習活動：組織的成果への影響と動機づけ要因の検討 *産業・組織心理学研究* 30 , 187-197 査読有

Miyajima T., & Yamaguchi H. (2017) I Want to but I Won't: Pluralistic Ignorance Inhibits Intentions to Take Paternity Leave in Japan *Frontiers in psychology* , 8 , 1508 査読有 10.3389/fpsyg.2017.01508

Tanibe, T., Shiraiwa, Y., & Karasawa, K. (2016). Opposition to popular legal participation and the reason–emotion framework: Empirical research on citizens' attitudes toward the lay judge system in Japan. *Journal of Human Environmental Studies*, 14, 9–16. 査読有 doi: 10.4189/shes.14.9

二木望・渡辺匠・櫻井良祐・唐沢かおり (2016). 実体性が両面価値的な集団への行動意図に及ぼす影響：エイジズムに着目して *社会心理学研究*, 32, 81–91. 査読有 doi: 10.14966/jssp.0879

秋保亮太・縄田健悟・中里陽子・菊地梓・長池和代・山口裕幸 (2016). メンタルモデルを共有しているチームは対話せずとも成果を挙げる：共有メンタルモデルとチーム・ダイアログがチーム・パフォーマンスへ及ぼす効果 *実験社会心理学研究*, 55, 101-109. 査読有 白岩祐子・唐沢かおり (2015). 量刑判断に対する増進・抑制効果の検討：被害者への同情と裁判に対する規範的なイメージに着目して *感情心理学研究*, 22, 110-117. 査読有 doi: org/10.2130/jjesp.1503.

Huang, L., Nawata, K., Miyajima T., & Yamaguchi, H. (2015) Values and hostile intent attribution to out-Group within China and Japan relations: The mediating role of perceived threat. *International Journal of Psychological Studies*, 7, 97-107 査読有 doi: 10.5539/iips.v7n3p97

Yamaguchi, H., Huang, L., Nawata, K., & Miyajima, T (2015) Perceived Intention to Harm In-Group as Mediator of the Relation between Nationalism and Emotion., *Advances in Psychology*, 5, 314-322. 査読有 doi.org/10.12677/ap.2015.55043,

〔学会発表〕(計 18 件)

谷辺哲史・橋本剛明・苫米地飛・正本拓・唐沢かおり (2018). 集団の実体性が集団への心の帰属に与える影響 日本グループ・ダイナミクス学会第 65 回大会, 神戸大学, ポスター.

森芳竜太・橋本剛明・唐沢かおり (2018). 『制裁への不十分感』が第三者の制裁行動に及ぼす影響. 日本グループ・ダイナミクス学会第 65 回大会, 神戸大学, 9月9日, ポスター.

唐沢かおり (2018). 『心』の概念工学. 日本社会心理学会第 59 回大会, 追手門学院大学, ワークショップ, 企画・司会

唐沢かおり (2018). Society 5.0 と心理学: IT システムと社会規範について. 日本心理学会第 82 回大会, 仙台国際センター, 企画.

齋藤真由・白岩祐子・唐沢かおり (2017). 司法参加意欲の規定因: 公正さ認知および主体・客体意識の効果 日本社会心理学会第 58 回大会, 広島大学, ポスター

谷辺哲史・橋本剛明・唐沢かおり (2017). 不祥事企業の集団実体性と購買回避理由の関係 日本グループ・ダイナミクス学会第 64 回大会, 東京大学, 口頭

平山和幸・和田将典・齋藤真由・保坂寛・唐沢かおり (2016). コミュニティ意識が地域防災行動意図に与える影響とその媒介過程 第 25 回人間情報学会, 東京大学, 口頭

Jung, K. H., Karasawa, K., & Masuda, T. (2016). The functions of schadenfreude and gluckschmerz in gossip situation. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, July 26, poster presentation.

二木望・唐沢かおり (2015). 心理的本質主義がジェンダーシステム正当性認知に及ぼす影響 日本社会心理学会第 56 回大会, 東京女子大学, ポスター

Todayama, K (2015) Naturalized epistemology and philosophy of science. The 5th East Asian and Pacific Conference of Philosophy of Science. 8月25日 ソウル市

〔図書〕(計 3 件)

唐沢かおり (2018). ステレオタイプと偏見. 竹村和久 (編) 公認心理師の基礎と実践 社会・集団・家族 (pp. 47-60). 遠見書房.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 山口 裕幸
ローマ字氏名: YAMAGUCHI Hiroyuki
所属研究機関名: 九州大学
部局名: 人間環境学研究院
職名: 教授
研究者番号 (8 桁): 50243449

研究分担者氏名: 戸田山 和久
ローマ字氏名: TODAYAMA Kazuhisa
所属研究機関名: 名古屋大学
部局名: 情報学研究科
職名: 教授
研究者番号 (8 桁): 90217513

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。